

ペットファースト

CSRレポート

vol.
5

音を運ぶ、パートナー。
聴導犬が寄り添う暮らし。



P's-first Pets
always
come
first

350人にひとりが、 聴覚に障がいを抱えている

厚生省の調査*1によると、日本では約36万人の方が聴覚に障がいを持っています。しかし、この数字は加齢による老人性難聴や、症状が軽度の人、身体障害者手帳を取得していない人は含まれません。実際には、もっと多くの方が音に不自由を感じていると言われています。

「聞こえにくさ」は 一人ひとり違う

一口に「聴覚障がい」といっても、一人ひとりその状態は異なります。補聴器を使えば聞こえる人、まったく聞こえない人、相手の口の動きを読んで会話できる人、手話や筆談が中心になる人。外見からは障がいの有無や状態が分からないため、周囲から必要な支援を受けにくいという悩みを抱えています。

聞こえないことによる、 リスクと不安

例えば、電話やメールの着信、周囲の呼びかけにすぐ気づけない。電車の緊急アナウンスや、車のクラクションが聞こえない。家でも外でも、情報の取得に時間がかかることによるリスクと、その不安がつきまとうため、耳の不自由な方の多くは、神経を張り詰めながら過ごしています。

*1 厚生労働省 平成18年身体障害児・者実態調査結果

音を聴いて、人を導く

聴導犬

耳の不自由な方に「生活に必要な音を知らせる」のが、聴導犬のお仕事です。例えば携帯電話が鳴ったら、音のする場所を確認した後、ユーザーの足にタッチして、音源まで誘導します。聴導犬は、ユーザーの身体の一部のように行動し、安全で快適な生活を支えるパートナーなのです。

Touch!!



ペットファーストの

聴導犬育成プロジェクト

日本で初めて聴導犬が誕生したのは、1984年のこと。現在の実働数はまだ73頭と、普及にはさまざまな課題があります。そこで2016年8月より、聴導犬の普及を目的とした「聴導犬育成プロジェクト」を開始しました。



3種の補助犬のひとつ、聴導犬

補助犬とは、視覚、身体、聴覚などが不自由な方のサポートをする犬のことです。目の不自由な方を誘導する「盲導犬」を筆頭に、身体が不自由な方をサポートする「介助犬」、そして聴覚が不自由な方に音を知らせる「聴導犬」があり、この3種類を総称して補助犬と言います。

聴導犬の仕事は、家の中のさまざまな音をユーザーである耳の不自由な方へ知らせ、音の鳴る場所まで誘導することです。そのため他の補助犬のように大型犬である必要がなく、室内での飼いやすさの観点からも、小型犬が多いのが特徴です。



全国で活動している聴導犬は、まだ73頭

厚生労働省のデータによると、盲導犬は全国に966頭いるのに対し、聴導犬は73頭しかおらず、必要とする人に十分行き渡っていないのが現状です。不足している理由は、素質のある犬が限られること、育成にかかる時間が長いこと、そして費用や人材が不足していることにあります。

聴導犬には、補助犬としての素質に加え、音への反応の良さなども求められます。一般的に、適性審査を通過し候補犬となるのは100頭中10頭ほど。さらに認定試験に合格し聴導犬として活躍できるのは、10頭中3頭と言われています。育成には約1～2年かかるため、申し込みがあってもすぐに貸与できるわけ

はありません。また、ユーザーには無償で貸与されるため、訓練から引退後のお世話まで、一頭当たり約300万円が必要になり、その費用は主に寄付によって支えられています。

補助犬別実働数（平成29年5月1日現在）

盲導犬	介助犬	聴導犬
966頭	70頭	73頭

出典：厚生労働省 補助犬別実働頭数

頭数を増やし、認知度の向上を

2002年に施行された身体障害者補助犬法では、「公共施設、交通機関、スーパー、飲食店、ホテル、病院や職場などの管理者は、補助犬の同伴を拒んではならない」と定められました。補助犬はユーザーの身体の一部であり、それを拒むことはユーザーの社会参加を否定することになる、という考え方が示されています。また、それまでは育成団体ごとに異なっていた認定基準を法律で統一し、公共の場で活動するためのレベルの均一化が図られました。

しかし、頭数が少なく認知度も低い聴導犬は、入店を拒否されてしまうこともまだあるといます。仕事

中はマントを着けていますが、聴導犬には小型犬が多く、一見すると普通のペットに見えてしまうこともあるため、認知度の向上が課題となっています。



外出時に身に着けているマント

聴導犬がデビューするまで

聴導犬として特に大切な素質は、「人に対する愛着」です。すべての基礎となる「人と一緒に何かすることを楽しむ」素地を伸ばしながら、訓練を重ねていきます。



1 適性のある子犬を探す

1次審査では人への反応、大きな音への反応など、約50項目を評価します。2次審査ではメディカルチェックを行い、通過した子犬が候補犬となります。



2 バビーファミリーとの社会化・基礎訓練

適性が認められた子犬は、1歳頃までバビーファミリーに委託して社会化を行います。月1回しつけ教室へ通い、家庭犬としてのマナーを身に付けます。



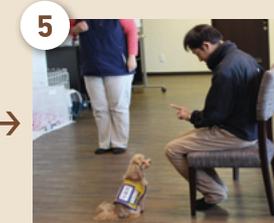
3 訓練士との聴導訓練

訓練士のもと、座れ・待てなどの基本訓練や、商業施設、レストラン、電車、バスなどでの訓練、ユーザーが必要とする音を知らせる聴導訓練を、約10カ月間行います。



4 ユーザーとのマッチング

訓練と並行して、ユーザーとのマッチングを行います。相性や適性などをふまえて貸与する犬を決定したら、ユーザーの状況に合わせて訓練内容を調整していきます。



5 ユーザーとの共同訓練

訓練の最終段階では、合宿施設やユーザーの自宅など、実際の活動環境に近い状況で、一緒に訓練を行います。飼育方法や法律などの講習も受け、認定試験に備えます。

ペットショップとして、できること

当社では、犬や猫を通じて、お客様に幸せな暮らしをお届けすることを事業の目的として考えています。世の中には、ペットとして飼われている犬猫もいれば、使役犬として訓練を積み、人間の暮らしを支えてくれる犬もいます。そうした使役犬の分野にも携わり、社会に貢献することはできないかと考え、発足したのが本プロジェクトでした。

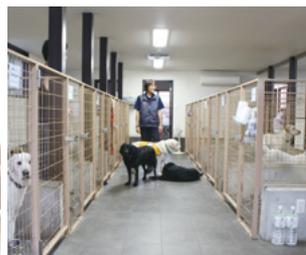
使役犬の中でもより身近な補助犬を対象を絞り、その中でも特に普及が進んでいない聴導犬について、支援を検討することにしました。普及が進まない要因として考えられるのは、候補犬や、育成にかかる資金、人材などの不足です。日々多くの子犬子猫を管理している当社にできることとして、「公益財団法人日本補助犬協会への「候補犬の寄贈」や「育成資金の寄付」を開始しました。

公益財団法人日本補助犬協会とは

日本で唯一、3種類の補助犬（盲導犬、介助犬、聴導犬）を育成している団体です。補助犬の育成及び貸与のほか、補助犬の認定、普及啓発、子どもの情操教育などに取り組んでいます。現在国内で活躍している介助犬、聴導犬の約半数は、日本補助犬協会が審査、認定したものです。



介助犬のデモンストレーション



盲導犬、介助犬の育成施設

6



認定試験

身体障害者補助犬法に関する設問回答や、自宅・公共施設での動きのビデオ審査、聴導動作の実技、ユーザーへの質疑応答などの試験を受けます。

7



聴導犬として認定!

認定はゴールではなく、聴導犬としてのスタートです。聴導犬とユーザーは、日々生活の中で信頼関係を築き、経験を積んで一人前のペアになっていきます。

8



貸与後のアフターフォロー

認定から1か月後、3か月後、6か月後、1年後、以降年1回、訓練士がユーザーの自宅を訪問し、聴導犬の活動状況の確認や、医療指導などを行います。

聴導犬育成プロジェクト

活動内容

- 1 実働している聴導犬への活動資金の寄付
- 2 候補犬の訓練資金の寄付
- 3 候補犬の寄贈
- 4 チャリティーイベントスポンサー

プロジェクトの活動歴

これまでに4頭の聴導犬を支援し、9頭の候補犬を寄贈しました。寄贈した子犬のうち1頭は、見事に聴導犬として認定され、ユーザーのもとで活躍しています。

2016年8月

- プロジェクト発足
- 聴導犬コスケをユーザーに贈呈、活動支援を開始



コスケの贈呈式



出席者が見守る中、聴導動作を実演するコスケ

2016年10月

- 適性審査を通過した2頭を候補犬として寄贈
- 聴導犬マロンの活動支援を開始
- 第4回ほじょ犬チャリティーカップにメインスポンサーとして参加



イベントでは補助犬の実演や、ドッグ競技体験会を開催



イベント会場内に活動紹介ブースを出展

2016年12月

- 適性審査を通過した7頭を候補犬として寄贈
- 聴導犬ラッキー、まもるの活動支援を開始



聴導犬ラッキー(マルチーズ)



聴導犬まもる(ヨークシャーテリア)

2017年3月

- ペッツファースト寄贈の候補犬エールが認定試験に合格し、聴導犬として活動を開始



聴導犬として認定された証であるマントを装着



エールの贈呈式

聴導犬のユーザー

Interview

2016年8月31日、ペットファーストが初めて支援した聴導犬、コスケくんの贈呈式が開催されました。ユーザーである高橋さんに、コスケくんが貸与されてから早1年。聴導犬との出会いから、その後の生活の変化について、お伺いしました。

【ユーザー】
高橋 宏美さん

【聴導犬】
コスケくん



コスケくん プロフィール

トイプードル 4歳

元々は繁殖場から保護された子で、聴導犬としての素質が見られたため、訓練を開始。2016年3月に見事認定を受け、聴導犬としての活動を開始しました。

- 2013年6月28日
コスケくん誕生
- 2013年9月末
ハッピーファミリーでの社会化を開始
- 2014年7月13日
聴導訓練を開始
- 2016年3月19日
聴導犬として認定、高橋さんに貸与

聞こえないことによる、 たくさんの「小さな不安」

私の家族はみな、耳が聞こえません。主人も、長男も、次男も、私も、先天性感音難聴といって、生活の音はすべて聞こえない状態です。コスケが来るまでは、音に関する小さなトラブルに悩まされていました。

例えば、インターホンに気づかず、宅急便は再配達を依頼してばかり。お風呂の水が出しっぱなしになっていても誰も気づかず、誰のせいだと言いつつ合ってしまった。朝、家族を起こすのは私の役目なのですが、目覚まし時計の音は聞こえません。そのため、タイマー付きの大きな肩たたき器を枕の下に置き、携帯と腕時計のバイブをセットして、緊張しながら眠りにつく日々…。音に関するミスが減らそうといつも神経を張り詰めており、家の中でもリラックスできずにいました。

そんな中、お店の入り口などに貼ってある「ほじょ犬」のステッカーを見て知ったのが、聴導犬でした。



初めて見た聴導犬の、生き生きとした姿に感動

実際に聴導犬を見てみたいと思い、日本補助犬協会の「オープンデー（一般見学会）」に参加しました。ここでは、補助犬のデモンストレーション、犬との触れ合い、施設見学、障がい理解のための体験コーナーなど、楽しみながら補助犬のことを知ることができました。

驚いたのは、すべての補助犬がとても楽しそうに仕事をしていたことです。特に聴導犬は大半が小型犬で、

見た目は普通のペットとあまり変わりません。中には、元はろう者のペットとして飼っていた子を訓練し、聴導犬として認定されたケースもありました。そんな一見して普通のワンちゃんたちが、生き生きと仕事をしている姿を見て、とても感動したことを覚えています。私自身、昔から犬は大好きでした。聴導犬を迎えることで、毎日の不安が少しでも軽減されればと思い、日本補助犬協会に聴導犬の貸与を申し込みました。



補助犬同伴を啓発するための
「ほじょ犬マーク」。
店舗や施設の入り口に貼られている



キッチンタイマーの元へ誘導する聴導犬訓練犬



▲朝は目覚ましの音が鳴ると布団に飛び乗って、前足でカリカリ揺いて起こしてくれる



▲携帯電話が鳴った時も、場所を確認してからタッチして教えてくれる



▲ボールを見ると、テンションアップ！



◀▲コスケくんと一緒にいったディズニーシー

お仕事が大好き！ そんなコスケの姿に 元気をもらう

訓練の最終段階では、実際に貸与されるユーザーとの合同訓練があります。約1カ月間、訓練センターの宿泊施設や自宅など、実生活に近い環境で聴導動作を訓練しながら、コミュニケーションや飼育方法を学びます。

その時にとても印象的だったのは、ブードルらしいコスケの足の速さ！音気づいて私の足にタッチしたと思ったら、あっという間に姿が消えて、音が鳴っている場所まで先に行ってしまうんです(笑)。コスケにとってこの仕事は、「褒めてもらえるとても楽しい作業」なんです。そのため、「早く早く！」とまるで急かすように、音が鳴っている場所と、私の間を何度も往復したり…。苦笑しつつ、「コスケ～待って～」と追いかけるのが、私たちのいつものやりとりになっていました(笑)。認定後、一緒に暮らし始めた今も、元気よく家の中を走り回り、私たち家族を笑顔にしてくれています。

新しく覚えてくれた音も！ 毎日の不安が どんどん軽くなる

コスケが来て、毎日の不安がとても軽くなりました。今はインターホンが鳴ると、コスケが私の足にタッチして教えてくれます。朝も目覚まし時計が鳴ると、布団の上に飛び乗って、前足でカリカリして起こしてくれます。目を開ければコスケが見つめていて、その視線に答えるように「おはよう、ありがとう」と声をかけるのが日課になりました。音に関するミスが減るとともに、家族の小さないさかきも減っていきました。

最近は、いくつか新しい音も覚え、教えてくれるようになりました。「冷蔵庫の扉を長時間開けていると鳴る音」と、「電子レンジの“チーン”という温め完了の音」です。よく温めたことを忘れて、ガッカリする私の姿を見ていたのでしょうか…。音を教えるのが私に嬉しいので、自発的に覚えてくれたみたいです。コスケの存在とその仕事ぶりに、毎日助けられています。

外出先では、 コスケのマントが私の 耳のことを代弁してくれる

普段の買い物などに出掛ける際も、時々コスケと一緒に連れて行っています。外では雑音も多いため、聴導動作を行うことは基本的にありませんが、「聴導犬」のマントを着けたコスケを連れて歩くことで、「耳が不自由である」と周囲に気づいてもらえるメリットがあります。以前はなぜか道を聞かれることが多く、そのたびに説明するのに四苦八苦していました。でも今はコスケのマントが私の障がい代弁してくれ、周囲の方も積極的にサポートしてくださり、とても助かっています。

一方で、街中でコスケ以外の聴導犬に会ったことがなく、聴導犬の存在がまだあまり知られていないことを実感しています。「どこでどうやったら飼えるの？」と聞かれることも多いので、同じような不安や悩みを抱えている方に、コスケと一緒に聴導犬のこともっと発信していくお手伝いができたら、と思っています。

大切なパートナーであり、 かけがえのない 家族の一員

普段のコスケは、ボール遊びが大好きです。自らボールを持ってきて、「投げて投げて」とアピールします。他にも、「バーン！」と撃たれて死んだふりをするのが得意です。そして、いつも家族の誰かに抱っこされている甘えん坊さん。聴導犬としても助けられています。コスケの存在そのものに癒されて、家の中が前より明るく賑やかになりました。コスケは私たち家族の宝物です。コスケの瞳はいつも私を見ていて、名前を呼べば一目散に駆けてきます。お仕事が好きで、音を教えた時に私が喜んでいことが何より嬉しく、ご褒美のおやつも楽しみで…そんなコスケと一緒にいられて、私も幸せです。

キャンプや公園など、色々なところへ一緒に出掛けてきましたが、今度はコスケとスカイツリーに登ってみる計画を立てています。これからもコスケと一緒に、楽しく穏やかな毎日を過ごしていきたいです。

CSR TOPICS

ペットファーストでは、聴導犬育成プロジェクト以外にも、ペットショップだからできるさまざまなCSR活動に取り組んでいます。



保護犬譲渡活動

捨て犬・捨て猫をなくすため、保護活動を行うNPO法人から犬猫を預かり、譲渡活動を行っています。獣医師による健康チェックを行い、体調を整え、店舗にある保護犬専用ブースでご紹介しています。ホームページでは、現在お店にいる保護犬の情報を御覧いただけます。



アニマルセラピー活動

セラピー犬とともに介護施設や幼稚園を訪問し、犬との触れ合いを楽しんでいただくアニマルセラピー活動を行っています。触れ合うことによる癒しの効果が期待できるほか、ペットと一緒に暮らすことの楽しさ、素晴らしさをお伝えしています。



マイクロチップ普及活動

全国の提携動物病院に、マイクロチップを無償で提供しています。現在、350カ所の動物病院にご協力いただき、患者であるワンちゃん、猫ちゃんへの無償装着を推進していただいています。ホームページで、実施いただいている動物病院の一覧を公開しています。



有料老犬ホーム

栃木県日光市にある「ペットケアセンター日光」にて、さまざまな事情で愛犬・愛猫を飼うことができなくなった飼い主様に代わって、終生までお世話をする「老犬ホーム」を運営しています。また、ワンちゃんをお預かりして次の飼い主様を探す「里親探し代行」も行っています。

